

特集

女性の視点から災害を考える

～なぜ防災や復興に女性の視点が必要なのか～

平成23（2011）年3月11日、三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の東日本大震災が発生しました。あれから一年。被災者は今も不自由な生活を余儀なくされています。

災害はいつどこで起こるかわかりません。私たちは誰でも被災者になる可能性があります。その影響は年齢や性別で大きく違ってきます。

平成7（1995）年の阪神・淡路大震災や今回の東日本大震災では、女性の犠牲者が男性より千人程度上回っているのをご存知でしょうか。

東日本大震災直後、テレビや雑誌では被災地の悲惨な光景とともに「災害時でも秩序ある日本」などと賞賛する報道が目につきました。しかしそこには、女性・子ども・障がいを持つ人・高齢者・外国の人など、身体的にも情報からも弱い立場にある人々が、どのような境遇におかれていたのか、あまり聞かえてこなかったように思います。

こうした災害から、私たちは何を学び、何をどう備えていけばいいのでしょうか。今回の特集では、女性の視点から、関連する本や講演会で学んだこと、災害への準備と心構えを（平川）



図1 東日本大震災における岩手・宮城・福島3県合計の年齢別、男女別犠牲者数

※平成23年4月11日現在、検視等を終えている者を掲載（警察庁資料から内閣府作成）

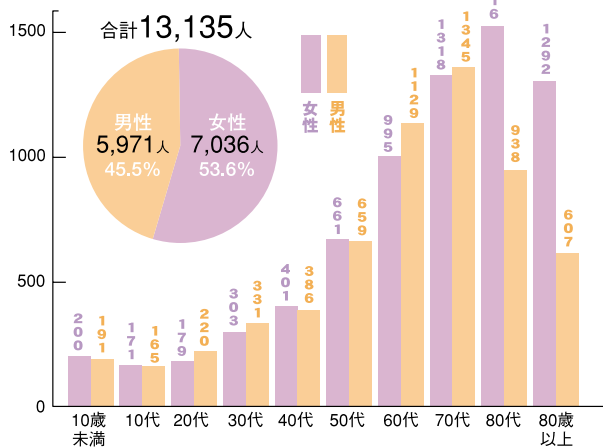
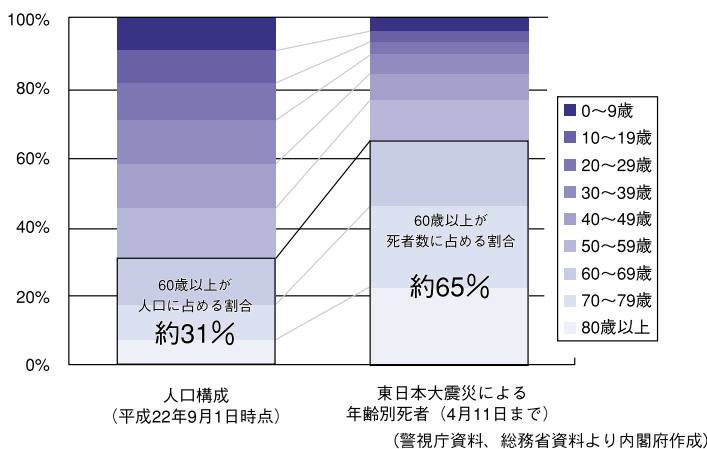


図2 東日本大震災における死者と地域人口の年齢構成比較（岩手県・宮城県・福島県）



災害時、女性を取り巻く状況は？

《環境や住まいによる被害》

東日本大震災では、津波により多くの建物が流出、破壊され、犠牲者の9割は溺死によるものでした。阪神・淡路大震災では、死亡原因の8割以上が家屋や家具の下敷きになったことによる圧死でした。いずれも、高齢者が被害を受けた割合が多くなっています。

《家庭》

阪神・淡路大震災では、耐震構造が万全ではない家屋が多く倒壊しました。そしてこうした家に住み、近所との付き合いが少ないひとり暮らしの女性は救出が遅れ、被害を受けることが多かったようです。無事救出された人の多くは、近隣の人に助けられたという報告もあります。

女性は震災前から家事・育児・介護を担っていることが多く、被災後はいっそう負担が大きくなります。

阪神・淡路大震災では、子どもへの虐待の相談も多かったようです。

阪神・淡路大震災では、耐震構造が万全ではない家屋が多く倒壊しました。そしてこうした家に住み、近所との付き合いが少ないひとり暮らしの女性は救出が遅れ、被害を受けることが多かったようです。無事救出された人の多くは、近隣の人に助けられたという報告もあります。

さまざまな状況から、家族が別々の場所で生活することになったりするため、妻が家族を抱えることになり、負担が増えたというケースもみられました。自らも震災のショックを受けた状態で、過労や不規則な日常生活が続くため、精神的に追い詰められたり不安や孤立感を抱えてしまうようです。